

「真正な実践」研究入門

—価値（哲学）領域の読解を事例にして—

池野 範男・福井 駿

教師は、専門科学（研究）者の研究内容を消費・活用するだけでなく、専門科学者という一人のひとの学習とその過程を読み解き活用することをねらっている。教師が進める学習に専門科学（研究）者の側から支援をする方法を見出すことが必要であり、それを試みているのが本共同研究である。本研究の一連の「真正な実践」研究は、専門科学（研究）者が行う研究を学校教師が教材研究として読み解き、その読み解きから一人の研究者の「学習」過程へと読み解く変換システムを開発しようとするものである。

本稿は、共同研究の分担研究である。本分担研究は、哲学領域の論文読解を手がかりにし、一連の共同研究の入門編として、「真正な実践」研究の意図、その手続き、研究の概要を説明する。そこで、続く各分担研究では、価値、記号、知識の3つの領域の専門科学者の研究論文の読解を通して、専門科学者の「学び」の過程を構成し、その過程を「真正な実践」として再構成する。そして、専門科学者が進めるその学問領域の「真正な実践」を解明し、学校教師や初任教师、教師希望者が活用できるようにする。

キーワード：真正な実践，論文読解，研究過程，学習過程，変換

Introduction to the Study on “Authentic Practice”

Norio Ikeno and Suguru Fukui

School teachers not only use and apply the work of professional scientists (researchers), but they also attempt to find a way that these scientists (researchers) could assist in the learning that school teachers advance, with the aim of understanding the process of learning of one individual and applying that understanding. This series of the study on “Authentic Practice” involves teachers learning research studies conducted by professional scientists as a study of teaching materials. From this newfound understanding, this series aimed to develop a system to elucidate and translate the process of “learning” of an individual professional researcher. This article describes the aims, procedures, and overviews of the study on “Authentic Practice”, and serves as an introduction to the subsequent studies. Each of the study will construct the process of “learning” of a professional scientist through the analysis of that scientist’s published work, reconstructing the process as “Authentic Practice.” By elucidating the “Authentic Practice” that these scientists advance in their given academic field, these studies aimed for school teachers, beginner teachers, and teachers in training to be able to apply the findings.

池野 範男・福井 駿

Key Words: Authentic Practice, Reading Academic Paper, Process of Research, Process of Learning, Transformation

1 共同研究の背景と研究仮説

(1) 共同研究の背景と目的

本共同研究のねらいは、教師が教科の学習の基盤となる内容を習得する基本的な過程を研究することにある。多くの教師が各教科の教材研究を専門科学者が著作した論文や著書の読解を通して進めている。そこで、本研究は、教師によって現実になされている論文読解の過程を研究領域別のパターンとして研究する。本研究がその基盤とすることは、教師、あるいは教員志望学生の読解の仕方こそ、教員としての力、実力を向上させる鍵の一つとなっていると考えるからである。

学校教育は、教科の授業を中心に進められている。そして、教科の授業においてその本質となるのが、その教科の内容である。教師やその志望者にとって、教科の内容というのは専門科学者の研究の成果を論文や著書から学び、そのまま教授することになりやすい。そこには、専門科学者の論文や著書（以下、論文で、代表する）に含まれている専門科学者の研究過程やその構造を学ぶという観点を欠如させている。

大学生、主に、教育実習生による教材研究の一環として論文の読解を課し、論文読解のタイプを経験的に見ると、次の3つを見付けることができる。第一は、当該論文の文章の読解に終始するもの。論文のてにをはまで詳細に読み取るわけではないが、各文章のそれぞれの読み取りに力の大部分を果たす。その結果が、文章に込められている個別の知識の蓄積となる。論文の章節構成、意図、意義などに関する読解までは到底至らない。結局、このタイプの学生は、教育実習担当単元、授業担当領域に関わる内容を該当論文から読み解くことで、精一杯なのである。第二は、該当論文の内容を整理して読み解くもの。該当論文の概要、要旨、構成を読み取り、担当部分の内容に関わる整理、構造発見を果たすことができる。第二のタイプの読解ができる学

生は、第一のタイプの個別知識集積から、一歩進み、論文の構成や構造の読解に至る。第三のタイプに至る学生はわずかなである。論文の構造を越えて、その論文の意義と位置を読み解く。

筆者の一人、池野は経験的に、教育実習生がこれら3つのタイプの読解をしていることを理解していた。これらのタイプはまた、読解のタイプでもあると、近年気づいた。

この気づきを発展し、本共同研究は、これら3つのタイプが実際にどのようなものであるか、各研究領域によってどのような読解構造になるのか、また、研究領域ごとで読解とその構造においてどのようなちがいがあのか、比較してみようというものである。各研究領域に属する専門科学者の論文読解の構造の分析を通して、その研究過程を探し出し、その中に専門科学者の「学習」を発見することができるだろうし、またその専門科学者の研究＝「学習」過程の発見は、子どもたちの「学び」への大きな手がかりになるだろう、と考えられる。

本共同研究は以上の問題意識と問題構造をもって、教師（教員希望学生）に対し、各研究領域の事例となる専門科学者の論文の読解を通して、専門科学者の「学習」の過程を見出す方法を提示するものである。その際、各学問研究の細分化された領域ではなく、大括りされた領域として、価値、記号、知識の3つの領域に分けて遂行する。3つに分けたのは、ひとの学習もこの3つの領域の総合体によって進められていると考えられるからである。

(2) 研究の目的と研究仮説

各研究領域の読解で検討されるのが「真正な実践 (authentic practice)」である。「真正な実践」とは、学習科学が研究者の行う学習のことを指呼し、「ある領域の研究者と似た活動に従事することで生徒はより深い知識を学ぶ」

(ソーヤー 2009:3頁) こと、また、「当該領域の専門家が各自の目標を達成するために専門的知識を総動員して行う諸活動全般」

(279頁)としている。たとえば、歴史研究者の実践として示していることは、「出来事の年月日や順序を記憶することではなく、歴史的な探究をすること」、あるいは、「一次資料を調べ、歴史学者が用いる歴史的な分析や論証の方法を用いる」ことである(3頁)。

本研究では、各研究領域の専門研究者の論文読解を通して、その研究領域の内容に関する「真正な実践」を再構成し、教師が活用できるように準備をしたい。

まずは、本研究の研究仮説をまとめて、提示しておこう。本研究で出発点として持っている仮説は、次の5つに集約することができる。

- ①研究者にも「学び」がある。
- ②研究者の学びは、研究論文の読解を通して、再生可能である。
- ③その再生は、
 1. 論文そのものの読解、
 2. 執筆者の使用する基本概念、理論による読解、
 3. その学問領域の基本概念、到達理論による読解、の3段階として可能である。
- ④研究者の学びの再生が、真正な実践を作り出す。
- ⑤真正な実践は、研究者の学びを学習者の学びに変換することである。

(3) 研究の方法と意義

本研究では、論文の読解として3つのタイプを設定し、それらに読解の拡大過程があると捉える。その3つのタイプとは、論文読解、使用概念による読解、基礎概念のレトリック作用による読解である。これら3つのタイプは、読解の拡大過程と見ることができ、3段

階であると想定する。読解のこの3つのタイプと段階では次のような点に留意し各読解を進める。

第一のタイプの論文読解では、単なる知識集積を超えて、論文の構成、論文の内容の構成、論文の問いの構成、論文の主要な問い(MQと以下、表記)とその主要な回答(MAと以下、表記)を軸に、論文読解を行う。この読解は、教育実習生は第一のタイプの読解で陥りやすい、文章のみの読解、あるいは知識の集積を一步進め、当該論文が持っている問いに注目して読解をすることに変更するものである。第二のタイプの読解は、当該論文中に使用される基本概念による読解である。ここでは、論文で使用され、中心となっている基本概念の特定、特定概念の説明と意義、論文研究内容の読解を中心に進め、論文の研究内容に関して、基本概念の読解により、論文に含み込まれているMQ-MAの発見とその意義付けの読み取りを目指す読解である。第三のタイプは、基礎概念のレトリック作用による読解である。この読解では、基礎概念・到達理論の特定、研究者の位置・立場に注意を払いながら、当該論文の基礎概念、基本的立場が含みもっている理解のレトリック、認知構造に注視し、研究者とその論文の研究領域における位置と意義を解明しようとするものである。

これら3つのタイプの読解は一連のものであるし、また、段階とみなし、より高度な論文読解へ至る手続きを示しているものである。このような読解の基本過程は、どの研究領域でも同一であろう。どの研究領域の論文を読むとき、読み取ることでは、基本的に同じであり、文章を読むことでは一致しているからである。そのちがいは、各研究領域で使用する概念、またその見方や考え方であろう。このちがいを配慮して、読解研究をしようとするのが、本研究である。本誌『学習システム研究』(第2号)の各論稿を見ていただければ

ば、各研究領域の読解の特質を理解していたただけるだろう。領域ごとに異なった読解とその構造の発見として、本共同研究は実行される。

この3つの読解とその要点を過程として図式化すると、次のように示すことができる。



この3つのタイプと段階をもった読解を各研究領域の論文に適用し、読解を進め、専門科学者の「学習」の過程を抽出する。その際、主に、広島大学大学院教育学研究科、文学研究科、理学研究科の専門科学者の研究論文を参考として取り上げ、専門科学者のインタビューや意見によって、修正をしながら、その基本的な「学習」を取り出すことにした。

本稿のみ、広島大学内の専門科学者の論文を取り上げず、一般的な専門科学者のものを選択し、インタビューによる読解の修正・変更などを行わなかった。本稿は、他の論稿と比較するために、通常の教材研究にて行われる論文読解と同様な過程で行った。

2 真正な哲学実践

—黒田亘著『知識と行為』第5章、「時間と歴史」を事例に—

(1) 哲学研究論文の読解

本稿では黒田亘著『知識と行為』¹⁾(東京大学出版会, 1983年)の一論文を取り上げ、その論文読解を行う。

取り上げる本書は以下のように構成されている。

序章	根拠から原因へ
第一章	指示という行為
第二章	心身問題の根
第三章	人と動物の境
第四章	知覚と動作
第五章	時間と歴史
第六章	意識・言語・行為
第七章	知るにいたる道
第八章	志向性と因果
附章1	現象と文法
附章2	「フッサールとヴァイトゲンシュタイン」の周辺

本書は、「哲学の枢要な諸問題を一貫して言語行為論の視角から論究」し、「知識と行為を、あるいは理論知と実践知を相関的・総合的に考察し、最終的にはその理論的統一を実現しようという構想」をもったものである(i頁)。本書のすべてを対象にし、読解することは紙面の都合上、難しいので、「第五章 時間と歴史」を取り上げ、その読解を行いたい。その読解で目指すことは、本章でなされる「時間についての哲学的考察」(135頁)である。哲学的考察とは何か、その構造はどのようなものかを、本章の論文読解を通して解明する。その読解は、先述したように、3つの段階で進められる。

(2) 第一段階＝文章の読解

論文読解の第一の段階は文章の読解である。この読解は、タイトルや節の題目に着目して、その節の文章を要約することにその活動の中心はある。要約を答えとする主要な問い(MQ)を見い出すことを読解で目指す。

「第五章 時間と歴史」は以下のように構成されている

- 一 時間の言語と言語の時間
- 二 時間表象の三つの形態
- 三 科学の時間と行為の時間
- 四 出来事を語る行為
- 五 言語形式としての時間
- 六 歴史記述の問題
- 七 自由と決定

タイトルである「時間と歴史」から、読者はさまざまな時間と歴史の関係を想像するだろう。哲学研究の主題は世界の基本的なことであるため、読者はそれぞれの経験の中でその主題についての観念を作り上げている。まずは、その観念を前提にして、著者の意図を想像する構えをする。次に本文の読解に入ると、読者は各節の主要な中身は何であるのかと考えることになる。そこで「第五章 時間と歴史」の各節の内容を概観してみよう。

まず、一では、「時間という非常に複雑でむずかしい問題事象を、時をあらわす言語のありようから」解明する（135頁）という本論文のねらいが示される。

続く二では、われわれが共通に持っている時間了解を成り立たせている3つのタイプの時間の表象・観念（出来事の帯、現前主義・現在主義、行為の時間）が説明される。

三においては、時間了解の3タイプのうちの、第1の「出来事の帯」という表象に基づく時間了解に特に注意を払い、第1タイプは「時間が科学的な世界認識の基本的な枠組みの一つである」（142頁）ということをも前提とするため、「時間という問題事象そのもののうちに食い込んで、その構成員ともなっている言語の働きを全く見失ってしまう」（144頁）という特質と問題点が示される。

四では、過去と現在、そして未来の語り方の違いに注目され、ギルバート・ライルの説

を取り上げ、検討がなされる。ライルが、過去もしくは現在に生じている出来事については、それを名指すことができるが、未来の出来事については名指すことはできないというのがわれわれの言語のルールであると考えたこと（144-145頁）を事例によって再吟味し、それは大筋において正しいということが示される。

五では、そのような「過去と未来の語り方の違いを」「過去の本質や未来の本質といったものから引き出そうという考え方」に対し、事例を使い、「その語りかたを度外視して、過去の過去性や未来のまさに未来たるゆえんを把握することはそもそもできないこと」（149頁）であるということが示される。

六では、出来事の帯という表象に基づく哲学的な時間解釈におけるさらなる2つの欠陥（事後的に言語概念を使用することとある出来事の詳細な言語表現の可能性）を指摘し、「一つの出来事は（E1）はその後に世界に生ずるいろいろな出来事との関係で次々に新たな性質を加えていく」のは「ただこのE1という出来事がその後に起こる現象すなわちE2と新しい関係に立つことにより、E1についてより適切な記述がなされ得るようになる」という意味においてである（154頁）というアーサー・ダントの考えを参考にすることによって、過去とは過去を語るわれわれの言語的行為によって構成されるものであると主張される。

七では、「過去に関する真理を引っくり返して偽とすることはできない」。「一方、未来にしかじかの出来事が起こるだろうと予言された場合、これを偽とすることは可能である」（156頁）。この違いを「われわれがいましようとしていること、あるいはいましつつあることの歴史は、まだだれも書いていない」ということであると考えた場合、われわれが時間を語る行為は言語の基本形式に制約されるとともに、言語行為の創造的で形成的な働き

を持ち（155頁）、「決定と自由」ないし「必然と自由」の両面を持っていること（157頁）が示される。

第一の段階の読解では、各節の概要から各節の問いを見付けることが重要である。以上の各節の概要から見い出される問いを示すと次のようになる。

- 一 本章の基本のねらいは何か。
- 二 われわれが共通に持っている時間の表象、時間の観念はどのようなものか。
- 三 時間を語る言語的な行為の基本的な形式はいかなるものか。
- 四 過去や現在についてのわれわれが語るときの語り方と、未来に生ずるであろう事についての語り方とはどのような相違があるのか。
- 五 過去、現在、未来の語り方、言語形式に示される時間は何を示しているのか。
- 六 第一のタイプの出来事の帯という時間解釈はどのような特質と問題点があるのか。
- 七 過去、現在、未来の時間について語ること（言語行為）は言語の形式とどのような関係にあるのか。

以上のように、各節においてそれぞれの要約と主な問いを整理し発見することができる。第一の段階の読解は、各節の概要とその問いの発見に留まり、内容や問いに関する関連や構造には至らない。それこそ、第二段階の読解の課題である。

（3）構造的読解

構造的読解とは、その論文が基本として使用する概念に注目し、論文の各節を1つの関係=構造として読み解くことである。それは、論文を、そこで基本として使用される概念によって構成された1つの塊だと考えると、各節は有機的な関係を持ったものと捉えられる。文章の読解で整理した要約と主な問いを手がかりに、各節の関係を、1つの構図とみなし、

構図的に配置し直し、構造として読み解くことである。

それでは、前の項目で整理した要約を念頭に置き、見出した各節の問いに着目して、各問いが論文全体の中ではどのような役割を果たしているのかを検討してみよう。

各節の問いは、一における本章の基本問題の設定、二、三、四の基本分析、五の基本的考察、六、七の発展的考察という構造を持っている。

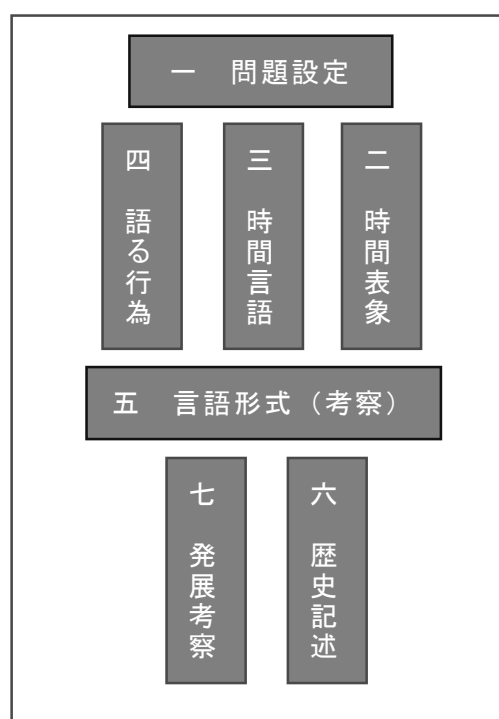


図1 第五章の論文構造

「第五章 時間と歴史」の各節の問いとその答えは問題設定、分析、考察、発展の4つによって構成されている。

このような構成は、内容と問いの両面から説明することができる。内容の側面から見れば、時間表象・観念、語る形式の基本形、その相違を問うことから、語り方や言語形式の時間の考察を経て、一つの時間解釈の特質と問題点、時間の語り方の言語形式の関係性を問うことへ発展させている。この考察と発展には、思い浮かべること、語ること、その形式

へと、考察に関して言語と行為の2つを方法として用い、それぞれの問いに答えている。

言語による表現には、主観的な表現と客観的な表現があり、科学的な認識を形成しようとする、主観的なものを客観的なものへと置き換える。たとえば、年表である。〇〇年、××が△△をする。建久3年、源頼朝が征夷大将軍に任ぜられる(鎌倉幕府)。これを1192年、・・・と書き換えると、科学性は高まるということである。そこには、指示対象は同一であるが、定量化による客観化が遂行される。

さらにまた、時間表現は行為を含むものである。それは、だれかが語るものだけということである。筆者、黒田は次のように述べる(3頁)。

「知識はひとに宿る。知識は何かの知識であると同時に、必ずまた誰かの知識であって、個体であれ集合体であれ、一定の人格的主体への帰属関係を顧みることなしにその知識について論議することができない。」

時間に関する知識もまた、誰かの知識である。そのために、出来事が生じた後にしか語ることもできない。先んじても語れないし、同時にも、語るができない。それはこのような「絶対の制限を負った、過ぎ行く者の言語」(157頁)なのである。

本論文には、次の2つの重要な見方・考え方が使用概念として働いていることに気づく。第一は、言語という視点であり、第二は、行為という視点である。この2つを見つけることで、論文の問いと内容に構造を探り出すことができるのである。

(4) レトリック的読解

構造的読解は、その論文で使用される基本概念に注目して、問いや内容の構造を探索することであった。図1とその解釈がその結果である。読解をさらに進め、その論文の構造に組み込まれているレトリック、つまり、そ

の論文を成り立たせている認知構造を解明することである。

一は、本論文の意図、二、三、四は一般的に了解されている時間の観念、その言語行為の特質と問題点、五は、我々が時間をどう語っているのかの反省、六がそのような反省によって、明らかになった歴史の問題、七は時間に関する新しい観念の結果考察である。本論文はこのように、問題設定、分析、考察、発展という構図をもっている。このような構図で、われわれがどのように時間という言葉を使っているかを分析することをおして、これまでの観念の欠陥を指摘し、自由と決定の問題に対して自覚的に成ることを迫っている。

「第五章 時間と歴史」には、次のような研究上のレトリック構造が組み込まれている。問題設定、分析、考察、発展という従来以来の哲学研究の基本構図の上に、言語行為という研究の新しい視点を持ち込むことで、時間と歴史に関する日常的なわれわれの語りの分析を行い、われわれの表象を詳細にするだけでなく、これまでの哲学的考察がもたらさなかった行動や決定とのつながりを探り出し、これまではなかった新しい提案を研究成果として創出する、というものである。哲学研究では、新しい問いが示されなければ、その研究は価値を持たない。新しい問いに答えようとする研究は新しい主張をもたらす。その主張は、旧来の見方から導かれる答え＝主張とは違うものを創り出し、現実世界の見方を変えることを提案する。このようにして研究は進展する。

研究を進展させるものには、次のような要素が必要である。

- ・ 問い方と問いを変化させること
- ・ 経験的事実を精査すること。
- ・ 新しい意味の提案

問いを変化させ、その問いに経験の精査によって答えようとする時に、生まれる意味の変化は、新しい世界理解の可能性となる。「第五章 時間と歴史」では、時間の本質とは何であるかではなく、時間を我々はどのように語っているかという問いを立てる。この問いにより、経験的事実からわれわれの言語使用を抽出し、時間という言葉の使用は、我々は現在の行為の意義を関係したものとして語る言葉を持っていないという世界の可能性を示している。これは、我々がより注目すべきことを指摘し、時間という言葉の使用がもたらす新しい意味を提案しようとしているのである。

第三段階の読解では、論文構造に表れるレトリックを抽出する。従来の哲学研究がなされていた、時間や歴史の概念分析ではなく、著者黒田による新しい言語行為分析のレトリックの機能を解明することである。このようなレトリックの働きでもって論文の構図や構造に即し、論文の研究意義を明らかにする。

そのレトリックとは、「日常言語分析」という哲学研究上のパラダイムである。それは本論文では、研究の視点として、また基本概念として、言語行為を分析道具に用いることである。

本論文は、言語行為を視点にすることで、時間の観念、過去、現在、未来、そして、歴史に関する哲学研究を変更させたのである。従来の、これらの事象そのものを追究しその根拠を問うことから、われわれがそれらのことを言語行為においてどのように使用しているのか、つまり、語っているのかを原因から追究することへ、哲学研究を転換させる。我々の言語の使用を「語り」と理解することによって、日常的なことばでもある時間を、客観的な事柄ではなく、主体的に我々は為す行為であると解釈できるようになる。

(5) 小結

黒田亘著『知識と行為』の第五章「時間と歴史」を3つの段階で読解したのが、以上であった。この読解の目的は、本章の読解の構造を示し、哲学の「真正な実践」の「研究」を「学習」構造に読み替えることであった。

論文読解は、3段階であった。第一段階の文章読解は、各節の概要から問いを導出することで、その文章の読解を構造読解へ架橋する。第二段階の構造的読解は、論文で使用される基本概念にもとづき、その論文の構造を導出する。本論文では、時間に関する哲学的考察に際し、言語行為という中心概念として使用することにより、客観的表現としての時間と主観的表現としての時間を比較する。そうすることで、注目点を言語に移しわれわれが時間をどのように語っているかを分析する。第三段階は、レトリック読解である。構造に含まれる認知構造を発見する。時間と歴史を本質から正当化する客観的な見方から、言語行為にもとづいて原因追究する見方へと変更する。このように根本的な見方の変更によって、時間に関する問題を哲学的に考察する。

この3段階の読解は、哲学的考察を次のような特質を持っていることを示唆している。

- 問題設定において、哲学的問題を提示する。
- その問題を解明する新しい見方や考え方を視点として提示する。
- 問題の新しい回答を見い出すことによって、より大きな解釈と説明をすることができる。

本論文に基づいた哲学的考察は、これまでの常識的な観念を前提にした時間と歴史に関する表象や観念が言語行為として改めて考え直され、これまで自覚されなかった時間や歴史の表象や観念の新しい考察可能性を提案す

ることができるようにしたのである。

本論文の筆者の黒田は、哲学研究を、過去や現在という時間と歴史に関する知識と行為を結びつけ、理論と実践の相関、総合を目指している。その結果が、本書『知識と行為』であり、先に示した、本書の冒頭文である。

「知識はひとに宿る。知識は何かの知識であると同時に、必ずまた誰かの知識であって、個体であれ集合体であれ、一定の人格的主体への帰属関係を顧みることなしにその知識について論議することができない。」(3頁)

論文読解における哲学的考察の特質は、このように客観的表現とともに、主観的表現をもち、知識と行為を隔てるのではなく、同時に遂行することである。別言すれば、「同じ一つの世界についての二つの語りかたを、すなわち二つの言語を対比する」(黒田 1985: 65 頁)ことである。

註

- 1) 黒田亘『知識と行為』(東京大学出版会, 1983年)からの引用は頁数のみ, (3頁)のように示す。

参考文献

黒田亘『知識と行為』東京大学出版会, 1983年。

黒田亘「時間と歴史」黒田亘『知識と行為』東京大学出版会, 1983年, 133-158頁。

黒田亘『行為と規範』日本放送出版協会, 1985年。

ソーヤー, R.K.編(森敏昭・秋田喜代美監訳)『学習科学ハンドブック』培風館, 2009年。

著者

池野 範男 広島大学大学院教育学研究科

福井 駿 広島大学大学院教育学研究科博士
課程後期